

札幌市斎場等あり方検討委員会

第7回会議

議 事 録

日 時：2019年10月18日（金）午後4時開会
場 所：WEST19 2階 大会議室

1. 開 会

○石井委員長 全員がそろわれましたので、最終回になりますけれども、第7回札幌市斎場等あり方検討委員会を開催させていただきます。

初めに、事務局から委員の出席状況及び配付資料の確認をお願いします。

○事務局（西尾生活環境課長） 事務局の西尾でございます。

本日もお忙しい中をありがとうございます。

今、委員長が言われたとおり、最後の開催となりますが、最後までご議論をよろしくお願いいたします。

本日の出席状況ですが、あいにく辻委員から欠席のご連絡がありましたので、本日は8名のご出席ということでございます。

それから、お手元の資料の確認をさせていただきます。資料1、基本構想の原案、冊子になっております。資料2は、前回の第6回会議からの変更点です。資料3は、A3横判のビジョン（案）で、いろいろ皆さんからご議論いただいておりますが、これまでの変遷と最終案をまとめたものをおつけしました。資料4として、基本構想の策定までのスケジュール、そして一番下に、これは正式な資料ではないですが、別紙としてビジョンについてご議論いただく材料として使っていただこうと思ひ、思いつく文言を並べたものでございます。メモがわりに使っていただければと思います。

資料は以上でございます。

2. 議 事

○石井委員長 それでは、記事を進めたいと思います。

お手元の式次第に沿って、基本構想の原案・修正版について、事務局からご説明願をいただきたいと思ひます。

○事務局（藤本企画担当係長） それでは、資料1と資料2を使いまして、前回6回の会議でご提示させていただきました、基本構想の原案からの修正点を中心にご説明させていただきます。

資料1と2を並べながらごらんいただきたいのですが、こちらの資料1の冊子を1枚めくっていただきますと、左側に目次がございます。こちらが大きく前回の会議から変わっておりまして、資料2のまず1ページ目の上の方に、構想の変更前と変更後のものを載せておりますけれども、第3章に各主体の役割、市民・事業者・行政はどういうことをやっていくのかということをもとめていたのですが、構成を見直しまして、新しい方の第5章に移しています。

順番としましては、1章に基本構想の概要、2章でビジョンとして将来どういったところを目指していくのか、3章として、古いバージョンでは、火葬場や墓地等に関する問題と書いていたのですが、問題ということだけではなくて、葬送に関する状況を説明する章としまして、名称も札幌市の葬送を取り巻く状況というふうに変更しております。

4章としましては、基本姿勢と言っていた部分を、姿勢と言ってもよくわからないので、どういうところを目指すかというビジョンの下にぶら下がるものとして、基本目標というふうに表現を変えております。4章が基本目標と施策の方向性です。

5章としまして、各主体の役割ではなくて、役割というとても与えられた、こちらから押しつけるような形に受け取られる部分があるかと思いましたので、関わり方ということで、市民・事業者・行政がこのビジョン実現に当たってどういうふうに関わっていけばいいのかということでの表現を変えております。

後ほど詳しくご説明しますが、もともと7章まであったのですが、6章と7章をまとめて、「基本構想の推進にあたって」と表現を変えております。

大きな構成としましては、1章から5章までが基本構想の大枠の部分で、将来どういったものを目指すのか。それに当たって、どういうところが障害になるのかというのは、3章で現状として示しまして、4章でそれをどうやって、解決していくのかという方向性を示します。5章でそれぞれの主体がどう関わっていくのかというものを示すことで、構想としての枠組みが一旦完成します。6章では、構想をどうやって進めていくのか、今後の動きの部分ということでの構成にしております。

細かな部分について、順次説明をさせていただきます。

資料1の冊子の方ですが、まず1章の基本構想の概要です。

こちらは、策定の背景や趣旨、位置づけ、対象期間を入れ込んでおりますけれども、右側の3ページの真ん中ほどに「基本構想を策定した趣旨」とありますけれども、この2段落目に、市民に多死社会が到来してさまざまな問題が起きることを知ってもらいまして、自分事として考えるきっかけにさせていただきたいという趣旨を追加しております。

従来の案では、多死社会が来ることによって起きる問題を踏まえて、将来どういう姿を目指していくのか、その施策の方向性を示すものですということしか書いていなかったのですが、市民にこういったことを知っていただくきっかけとしてさせていただきたいという趣旨も追加させていただきました。

同様に、左側の4ページの部分、中段以降に位置づけとしてあります。

こちらの3点目にも、意識を変えるきっかけとしてさせていただきたいという位置づけを入れ込んであります。

あとは、ほかに例のない構想であり、札幌市以外の自治体ではこういったものをつくっている例をまだ確認できておりませんので、その火葬場や墓地という施設の整備だけにとどまらずに、市民の意識を醸成していくという観点を入れ込んだほかに例のないものということも考えております。

2章に移ります。

これはビジョンの部分になりますけれども、ビジョンとして掲げる具体的な表現につきましては、後ほど改めてご議論いただきたいのですが、構成としましては、中段に図を示しておりますけれども、その前ふりの部分です。2段落目のところですが、まず、葬送の

あるべき姿を示すものではないということです。将来こういう葬送をしてくださいというように、札幌市、行政側から葬送の形を押しつけるものではないということを明記しました。

4段落目の「そのような中にあっても」というところからですが、それぞれの経済的な事情や置かれている環境の許す範囲で、可能な限り望む葬送を実現できるようにすることが必要ではないか、どんなことでも実現できると受け取られない、それぞれが望む方法、できる限りのことをやれるような状況をつくってあげたいという趣旨を入れ込んでおります。

同じページの一番下のビジョンの実現に向けてのところで、市民の意識変化と行動が必要ということ語りかけるような形で追加しております。

資料2を1枚めくっていただきまして、第3章になります。こちらの表題を火葬場や墓地等に関する問題から札幌市の葬送取り巻く状況と変更させていただきましたが、中の構成も若干入れかえをしております。

従来の構成では、人口と世帯数がこういうふうに変ってきました、今後こういうふうになっていきますよということを示していたのですけれども、その世帯数の部分は、後段で出てくる引取者のない遺骨の問題のところまで余り関係がなかったもので、そのつながりをよくするという意味で、世帯数の部分を後ろにずらしております。

3番は、墓地と納骨堂の問題の部分ですが、中の構成の順番を並べかえまして、市営霊園の話の先に入れまして、その後に民間霊園も起こりそうな話を入れ込む形に見直しております。

記載してある表現などは大きく変わっておりません。全体的に文言を見直しておりますけれども、基本的な書き方は変更しておりません。標題と構成、並べ方を変えております。

具体的に追加した部分は、13ページになりますけれども、里塚斎場の問題点の中で、札幌市には里塚斎場と山口斎場の二つしかありませんので、里塚はこういう問題があります、一方で山口はどうなのかという話もしておく必要があると思ひまして、見取り図を追加すると、里塚斎場の問題点を踏まえた設計としていきますので、特段、運営上の支障は発生していないということを追記しました。

次に、冊子の21ページになります。

4番として、引取者のない遺骨の問題として、先ほどお話ししましたとおり、世帯数のグラフをここに入れ込んでおりますけれども、世帯数のグラフは、高齢単身世帯の内訳のみならず、核家族世帯の内訳も、こちらは国勢調査の実績の分しか載せておりません。推計データはありませんが、こういうふうに推移していますということ載せております。というのも、孤立死してしまうような高齢単身世帯がふえるというのは、核家族化ということもある程度影響している部分がありますので、推移も読み取れるように追加をしました。

次に、24ページの第4章の基本目標と施策の方向性です。こちらは、タイトルを基本

姿勢から目標に変えたということと、それぞれの項目の表現を前回よりも膨らませて、よりわかりやすく表現させていただいております。

ここは、あくまでも施策の方向性になりますので、文章の表現としましては、「進めます」とか「見直します」というように、方向性を示す形にとどめております。

書いている内容も、ある程度抽象的といいますか、後段で出てくる具体的な検討事項と区別をするため、少しぼんやりした表現にしております。

資料2の3ページに行きます。

その前に、本書の27ページは、最初にお話しした各主体のかかわり方ということで、5章に市民・事業者・行政のどういうことをやっていけばいいのか、かかわっていけばいいのかということを示してきております。中に書いてある内容は、従来のものから大きくは変わっておりません。

その次のページに、その3者の役割とビジョンの位置関係、従来のマトリックスで示したものは、意識醸成、火葬場、墓地という三つの分野とそれぞれの主体がどうかかわるのかということを示そうとしましたが、分野ごとにとするのは難しい部分がありましたので、単に3者各主体の連携の取り組みの上にビジョンが位置づけられるということで、文字ばかりになっても見づらいところがありますので、簡単な図を入れさせていただきました。

29ページの6章の部分です。

こちらは従来の6章と7章を統合した形で、新たに組み立てをしています。

資料2をごらんいただきたいのですが、変更前としましては、6章に問題解決に向けた検討として、友引開場とか無縁墓の対策など、具体的にこういうことを検討していきますということを列挙しておりましたが、それを中に入れ込む形で6章をつくっております。

6章は、5章までで示した基本構想の枠組みに沿ってどうやって進めていくのかということに記載しておりますけれども、1番目として、まず、協議体をつくっていくことを掲げております。

従来の案では、葬送支援協議会という名称を使わせていただいておりますが、支援をするという表現自体が、そもそもお金を補助するようにとられてしまうところがあるので、葬送支援協議会という団体が既に存在していたことがわかりましたので、名称としてはもう使えないなということで、名称を仮置きするのではなく、単に協議体ということで位置づけさせていただくことにしました。具体的な名称は今後詰めていく形です。

ここは、あくまでも市民・事業者・行政の3者が連携してやっていくことを想定していますと記載しています。

その次の30ページからは、問題の解決手法の検討ということで、市民の意識醸成、多死社会に対応した火葬場、少子高齢社会に対応した墓地という三つの部分について、具体的にこういうことを検討していきますというものを並べております。

これは、30ページから33ページまでずっと続きます。34ページには、ビジョンから基本目標、施策の方向性、検討する内容を1枚の図にあらわした形で、施策の体系とい

うことで示しており、どういうふうビジョンにつながっていくのかをここで集約する形になります。右の35ページは、検討した取り組みを具体的にどう実践していくのかというところ。火葬場と墓地に関する計画を2021年度に策定する予定で、その後に取り組みを実践し、進行管理を行っていくという流れです。

この流れの部分は、前回ご提示した資料と変わっておりません。

最後に、この後パブリックコメントなどをしていきますので、市民からのご意見を募集し、その対応などを載せていくことを考えております。

全体の構成としては大きく変わった部分は、各主体の役割として入った部分をかかわり方として章の部分に移したということです。また、6章と7章を集約しまして、具体的に基本構想でどうやって進めていくのかという表現に変えたということが大きな変更点です。

説明は以上になります。

○石井委員長 どうもありがとうございます。

それでは、前回会議で出た意見を踏まえて見直していただきました、まず、基本構想の全体構成というところで皆様のご意見をいただきたいと思います。その後、表現も含めた内容についての議論をさせていただきたいと思います。

ご意見ございましたらご発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

前よりはすっきりした印象を私自身は持ちましたが、いかがでしょうか。山上委員はどうでしょうか。

○山上委員 私も通読したのですけれども、前よりすごく読みやすくなって、よかったなと純粋に思いました。

○石井委員長 中島委員はいかがでしょう。

○中島委員 同じです。

○石井委員長 福田委員はいかがですか。

○福田委員 全体の構成は、こんな感じでおおむねいいのではないかと考えています。

○石井委員長 前回、構成のところではいろいろなご意見をいただきましたけれども、随分ご検討いただきました。

澤委員はいかがですか。

○澤委員 わかりやすくなっています。

○石井委員長 高田委員はどうですか。

○高田委員 前回欠席したのですけれども、大変よく整理されていて、すごくよくなったのではないかと思います。

○石井委員長 高橋委員、いかがですか。

○高橋委員 前回、やわらかい表現にさせていただいてということで、市民に語りかける感じがかなり盛り込まれたので、それはとてもいいと思います。

○石井委員長 ありがとうございます。上田副委員長、いかがですか。

○上田副委員長 私は、第4章で基本目標①、②、③とかがすっきりしてわかりやすいと思ったのですが、第3章の問題点と第4章の目標が対応しているのかどうか、逆に4章がすっきりし過ぎているので、もしくは第3章が複雑過ぎるのか、どっちかわかりません。

例えば、第3章で「2 火葬場の問題」と書いてあって、これをぱっと見ただけで、火葬場の何が問題なのかがわかるのか。結構きちんと読まないと、問題とタイトルで挙げられていても、一体何が問題なのか。

15ページの3の(2)は何が問題なのかわかりやすいのですが、ほかのところだと、問題と書いてありながら、何が問題なのかよくわからないところが幾つかあります。かつ、その後の解決策の4章以降が3章の問題に対応しているのかどうなのか、遺骨の話も一体どれに対応したのか。

○石井委員長 4章と3章の関係性が少し弱いところがあって、4を受けて6章に行っていますから、基本的には6章の具体的な対応と3章の主要な問題が合っているかどうかということかと思います。

○上田副委員長 それで言ったら、6章の34ページが3章の問題を網羅しているのかという対応関係ですが、下に問題の解決手法の検討と書かれているので、3章に挙げられている問題が解決手法の検討で網羅されているのか、改めて今説明を受けて思いました。

○石井委員長 多分、課題を全て解決するという構成になっていない部分があると思います。逆に、34ページの一番下に第3章との関係が書いてありますね。これが最後の部分ですね。

○上田副委員長 これが最後の解決策です。これが全て解決策のメニューになります。

○石井委員長 34ページで、3章で挙げた問題点との対応みたいなことを少し整理しておいて、全く触れていないことがあったら、それを課題として除く必要はないと思うのですが、このビジョンでは解決対象にしなかったとか、そこまでできないとか何か言いわけを書くとかね。

○上田副委員長 単純な質問として、22ページの孤立死の話とかも、「対応が必要な深刻な問題です」と書かれているので、これが34ページのどれに対応していたのかなとなったときに、わからなかったです。実際にどれなのか、単に表現でわかりにくいだけなのか、本当に書かれていないのか。

○事務局（藤本企画担当係長） 単身の高齢の方を減らすというのが、我々の業務の範疇としては難しい部分がありますので、基本的には意識を変えていただいて、事前に葬送に関して準備をしていただくことで孤立死をしないような、死後事務委任契約なども含めてですけれども。ただし、完全に独り身の方でなくて、ただ離れて暮らしている場合もあるので、家族の方との共有という意味も含めて、意識の部分で解決策として考えられるところかと思います。

○上田副委員長 というところが意識醸成のところカバーできているということが見えたほうがいいと思いました。

○石井委員長 むしろ、そこはいろいろなことを行っていいのだと思います。34ページにちょうどスペースも少し空いているので、そこにもし必要だったら、書きぶりのところで、意識醸成だけでは十分でないかもしれないけれども、そういうことからやらなければならないとか、課題全体のうち、どこまでカバーできるのかみたいな話は一言書いてもいいのかもしれない。孤独死自体はなくせないし、なくならなくても、現象として孤独死しても、準備をされていて、関係者が困らない形で、ゼロではないけれども、一定の対応をされていて、それなりの葬送を済ませることができれば問題解決にはつながるわけです。

○上田副委員長 おっしゃるとおり、多死社会は避けられないので、それに対してハードで行政ができることがあって、それ以外の部分は意識とか市民のところ、それが両方あるからこそ、不安がなくなるというプランのはずです。

○石井委員長 行政ができないことがあるのは全く問題ないし、無理に何でも行政がやるというのは、このビジョン自体の考え方でもない、意識醸成がどういう意味で重要かということが伝わればよいということだと思います。いろいろな意味で重要だという話になっていると思うので、それが見えるように書いたほうが、訴えかけがより強くなると思います。多分、問題はいろいろあって、後ろのほうで、十分解決できないけれども、一部手がかりのところまでいくみたいな話が幾つかあると思います。それは、そこがわかるように書いておくというぐらいで考えればよいと思います。

○事務局（藤本企画担当係長） この基本構想自体は、15年を対象期間としているものになりまして、6章で提示しています問題の解決手法というのは、これをやれば、今挙げてきた問題の全てが解決できるというものではなくて、まず、やれるものというニュアンスがあると思います。

○石井委員長 だから、触れてというような意味合いの話になるのだと思います。解決できないけれども、入り口の第1ステップはとるという感じでしょう。それはいいのではないですか。

○上田副委員長 先ほど藤本係長が説明されていたようなことがここで見えればよいような気がします。

○事務局（藤本企画担当係長） 今回、資料としては出さなかったのですが、現状があって、その上にビジョンとして掲げるものがあって、ビジョンに行くための道筋が施策の方向性と基本目標になると思います。6章で掲げて検討しようというのではなく、この問題から一歩踏み出たあたりのつながりがここで全部見えるようになっていけば、わかりやすいということでしょうか。

○石井委員長 話としてはそうです。中身を変えるのではなく、そういうつながりを少し整理しておくだけの話です。そのほうがわかりやすいということは間違いはないと思います。

○山上委員 今の話だと、30ページの㊸のところ、孤立死を防ぐためには、こういう意識醸成が必要だというような加え方でもいいということですね。

○石井委員長 すごく厳密に対応関係を整理する必要はないと思うのです。カバーしてい

るところがわかればいいという感じでしょうか。

○事務局（藤本企画担当係長） 先ほど説明しました3章の何が問題なのかというところが……。

○石井委員長 そう言われればそうなのですが、ここは単に項目立ての問題です。問題という言葉を使うのをやめていただいて、能力なり設備なりの問題だったら、火葬場は能力不足とか、更新とか、何をしなければいけないという言葉を出したほうがいいと思います。問題とか問題点という言葉は、やめられるならやめたほうがいいかもしれません。

○上田副委員長 逆に、納骨堂みたいな感じの書き方は、こういうふうに書かれているほうがわかりやすいと思います。小見出しに問題点が具体的に書かれて、市営霊園の老朽化とか、基金の逓減というものが小見出しに入っていると、問題はこれなのだというのがわかります。

○事務局（藤本企画担当係長） 11ページに時間帯別出棺件数と書いておまして、これは午前中に集中しているということなので、別なタイトルにすればわかりやすいです。

○上田副委員長 時間帯による集中とかいう話ですね。

○石井委員長 大きい1、2だけ問題というのをやめて、何か考えて、あとは問題点でも何でもわかればいいと思います。

○高橋委員 よく読めば、わかるのです。

○石井委員長 もちろんそうです。見出しでどこまで伝えるかという話なので、大きいところは、何か具体的に伝える名詞を書いたほうがいいのかというだけの話です。書けないのだったら、しょうがないけれどね。

火葬場は、能力不足とかそういう問題だよ。いろいろな形でそれがあらわれるわけです。

○事務局（藤本企画担当係長） 亡くなる方の件数が増えることにどう対応していくか。

○中島委員 その中で、時間とかの偏りがあるから問題だ、そうなりますよね。

○石井委員長 そうです。

○事務局（藤本企画担当係長） そこに集中してしまうと、それに合わせた能力が必要ということになります。

○石井委員長 全部能力の問題なのです。ある時間集中したらそこが足りなくなるということなのです。亡くなる方がふえても能力が足りなくなると。全部能力の話です。

○高橋委員 大枠は、多死社会を迎えるので、間に合わなくなるということですね。

○石井委員長 大きいところだけ何かに置きかえることができれば、ちょっと考えていただくぐらいでいいです。できなかつたらしょうがないです。

4の引取者のない遺骨は、それ自体が問題なのでしょう。

○事務局（藤本企画担当係長） そういう状況です。

○石井委員長 引取者のない遺骨の増加とかということですね。置きかえは、そんなに難しくなくできるような気がします。

読む人は、見出しを見て、問題が何かがわかるから、そのほうが伝わりやすいという意味で工夫していただくということですね。絶対だめだということではなくて、工夫できるのだったら、より具体性のある名詞を使って書いていただいたほうがいいということだと思います。

構成の話は、そのぐらいですかね。

今ちょっと出たようなところだけ、課題と施策対応みたいなことを今よりわかるような工夫をするということと、問題というところですね。言葉をうまく置きかえることができるところは置きかえて、わかりやすく伝えるということをご検討いただければと思います。

それでは、基本構想のビジョンについて、これまでの案の変遷と委員の皆様の意見、最終案について事務局からご説明していただけるということなので、お願いしたいと思います。

○事務局（藤本企画担当係長） A 3判の資料3でご説明させていただきます。

ビジョンとして掲げようとしているものの表現については、いろいろとご意見をいただいて、何度も変わってきている部分があります。最初のほうまで振り返ってもしようがないと思いますので、5回目の会議の案から、こういった形で変わってきていますということを、その案に対する主なご意見も含めて簡単におさらいをさせていただきます。

5回目の会議では、ビジョンとして「不安なく人生の最期を迎えられる社会へ」ということで、副題として「より生き生きと人生を送るために」としておりました。

この下にぶら下がる形の関係性もよくわからなかったところがあったと思いますが、一番から、環境の整備、火葬場や墓地がきちんと整っている、葬送を行う環境が整備されているということ、また、右側に行きまして、意識の変化、これは主に市民の葬送に関する考え方がきちんと変わって共有できているということです。

この二つが整うことで、行動の実践ということで、誰でも希望する葬送を実現できるようになりましたが、ご意見としては、3番目の「誰でも希望する葬送を実現できる」というのは、行動・環境・意識ということで、この案では行動の実践のところを書いている部分は、全てが組み合わされて達成できるということや、環境の整備や意識の変化には、それぞれ行動も含んでいるのではないかというご意見がありましたので、少しコンパクトにした形で下の第6回会議でご提示した部分があります。表現も大きく変わっております。

ビジョンとして掲げるものの表現は、「誰でも希望する葬送を実現できる社会」としています。

人生の最期となると死ぬという意味になりますけれども、今回のビジョンで見ているのは、あくまでも火葬場や墓地という葬送関係のところになりますので、人生の最期ということ、あらゆる悩みや不安がないととられてしまうところもありますので、誤解を受けないように、葬送という表現に変えたというのが第6回目の案になります。

これにぶら下がる形として、意識と環境の配置を変えました。

市民に意識を変えていただくのが重要ということで、左側にしております。

これも、この二つが整うことで上のビジョンに上がっていくというような書きぶりになっております。

これに対するご意見としては、誰でも希望するということに違和感がある、葬送の自由を推奨するようにとられてしまうのではないかと、また、見送られる側の視点が基本になっていたのですけれども、見送る側の視点も必要ではないかということです。

このビジョンの案の中には入っていませんでしたが、「尊厳をもって」という言葉を入れたらいいのではないかというお話がありました。

集約すると、尊厳をもって葬送を実現できる社会で、見送る人、見送られ人の観点が入るものにするべきではないかということです。

このご意見を踏まえて、10月10日の時点で皆様にメールで一旦の案として送らせていただいたものが一番下のところです。

大きな枠組みとしては余り変わってはいないのですが、ビジョンとして掲げる将来の目指す姿のところは、「尊厳をもってそれぞれの葬送を実現できる社会～不安なく人生の最期を見送り、見送られるために～」としておりました。

この「それぞれ」という言葉を足したのは、葬送に関して、こういうものがやりたいという希望は人それぞれだということをお知らせしたかったのですが、単純に「尊厳をもって」となると、特定のものということをお知らせされても困りますので、人それぞれの「尊厳」のある葬送を実現できるような形ということで入れております。

あとは、見送る側と見送られる側の視点ということで、副題に入れた形になっております。

意識の変化と環境の整備というのは、それぞれビジョンはこういうふうになっているという状態をお知らせすることで、市民がこういうふうになっているということで、意識の変化のほうは、市民の姿と明示した形で具体的な状況を説明する形にしました。

環境の整備のほうは、事業者と行政が中心になってやるので、「事業者・行政の姿」としております。

これが10月1日時点の案でしたが、それ以降、検討を重ねまして、右上の部分です。これが今回ご提示している冊子の中と同じものになりますけれども、将来の目指す姿としては、「それぞれの尊厳ある葬送を実現できるまち～葬送に不安なく、より生き生きと暮らし続けるために～」としております。

下の部分の表現は10月1日の案と変わっておりません。

ただ、「将来の目指す姿」と「具体的なイメージ」をイコールでつなぐ形にしております。というのは、下の「意識が変わり行動している」とか「安定的な環境が整備されている」というのは、ビジョン、目指す姿が達成された状態を具体的に説明しているにすぎないと考えまして、下が整ったから上になるという形ではなくて、イコールでつなぐべきものではないかということで、こういうふうに変えております。

戻りまして、将来の目指す姿の表現の部分です。

10月1日の案の尊厳をもってという書き方ですが、下のほうに案①から②に修正した考え方の部分がありますので、そこをご説明させていただきます。

1点目は、イコールでつないだ理由です。

文末が「社会」だったのを「まち」に変えているのですが、多死社会に対応するための構想という位置づけの中で、何々の社会を目指すというのはおかしいと感じまして、札幌をそういうふうにしていきたいということで「まち」という表現に変えました。

3点目は、尊厳をもってですと、見送る側の視点、尊厳をもって葬送するとなると、残された側がそういうふうに行けるとする視点しか読み取れないと思ひまして、「尊厳ある」に変えております。見送られる側の尊厳を保持する必要があり、尊厳という言葉はそのために使うべきではないかということです。

4点目は、ビジョンで示す状態は、見送る遺族側と見送られる側の亡くなる方の意識や考えが共有できている状態が前提となっていると思ひますので、ここに双方の視点を入れる必要はないのではないかと考えました。

ただ、施策の方向性には、当然、遺族側、つまり送る側の視点が必要になりますけれども、ビジョンとして目指す姿というのは、送られる側の尊厳を保持するという観点だけでよいのではないかということで、「尊厳ある」としています。

最後の5点目ですが、「不安なく」という表現だけですと、マイナス要素がゼロになるとしか読み取れないのではないかと思ひまして、当初の案では、より生き生きと人生を送るためにというプラスの要素が出てくるということでしたので、そういう表現をまた復活させるほうがよいのではないかということで、副題を「葬送に不安なく、より生き生きと暮らし続けるために」と変えております。

一旦、我々事務局側ではベストな案として考えたものがこちらです。

これまでのご議論を振り返っている中で、1個に絞り込むのがなかなか難しいということで、下にビジョンの候補として幾つか挙げさせていただきましたが、もう一枚、A4判で最初にメモとして使っていたきたいということで、ビジョンの他の候補というものを用意しております。

「不安なく」「尊厳ある」もしくは「尊厳をもって」「葬送」「人生の最期」というものも含まれるべきということでキーワードとさせていただきました。

あとは、主題の候補、副題の候補です。

一番下には、今までと書きぶりも全く違うのですけれども、主題と副題をセットにしたものの候補も挙げさせていただきました。

この点について、最終的にどういうふうにとまとめていくかということですが、今回は最後のあり方検討委員会になりますので、この中身についてご議論いただいた上で、委員会としてのご意見をまとめていただきたいと考えております。

説明は以上です。

○石井委員長 いろいろと検討していただいたので、かえって目移りして議論が混迷する

かもしれませんね。

基本的には、ワーディングで内容が変わることが余りない気がします。要するに、言いたいことの中身が変わっていることはほとんどないので、どういうワーディングが見てもらうときに市民の皆さんに浸透するか、そういう観点でどういう言葉が入りやすいか、私はそんなにこだわりがないのですけれども、ここがうまく伝わってくれるのは大事なことなので、ご意見をいただければと思います。

○福田委員 一つだけ気になったのは、「より生き生きと」というプラスのイメージという趣旨はわかります。しかし、葬送の問題を解決したところで人生がより生き生きになるかということ、なかなか難しいと思います。つまり、不安を解消するという意味では、こういうことをいろいろやるかもしれないけれども、人間はどうやったら生き生きするかというと、これは難しい問題で、お金があったら生き生きするか、健康だったら生き生きするか、それだけではだめなのです。

もう少し考えれば、生きがいというものが必要になります。そういうものがこれをもって与えられるのかということです。プラスにしようと思うのは大いに賛成ですが、「より生き生きと」になると、ちょっと抵抗感があります。これで生き生きになるのかと思います。

○石井委員長 そういう話だったら、ここを全部削って、安心して暮らし続けるためにとていいと思います。安心まではありなのだと思います。安心を超えるのは、葬送の問題としては、そこまではお約束できないということですね。今の福田委員のご意見ですと、安心というところが一番積極的な言葉になるのだらうと思います。そういう考え方も、あると言えはるので、割と問題がぼけないということと言うと、安心ということを明確に出していただくのは一つの考え方かもしれません。そんなにぶれないし、意味は伝わると思います。後ろ向きではないですが、すごく前向きでもないです。

○福田委員 不安を取り除くというところがスタートですね。

○石井委員長 そこをポジティブに言いかえると、安心ということなのです。

○高橋委員 生き生きというのは、ちょっと言い過ぎるみたいな感じなのですね。

○石井委員長 安心という言葉までは伝えたほうがいいと思うのです。ポジティブな言葉が僕は必要だと思います。どこまで言うかということで、確かに「生き生きと」というのは、難しいと言えは難しいかもしれません。安心して暮らせるという前提には絶対になります。

○澤委員 会に相談に来られた方の問題解決みたいな場合だと、必ず最後に出てくるのは、「ああ、これで安心した」という言葉です。ですので、安心という言葉ここに当てはまるべきだと思います。

○石井委員長 そのほうがフィットするかもしれませんね。そうしたら、そんなに迷わなくてもいいのではないかと思います。ごちゃごちゃ安心というのは、そんなにつかないですね。

○高橋委員 安心はここにありますがね。

○中島委員 相談に来た方は、最後は必ず「安心した」という言葉を使います。

○澤委員 そうです。安心して生活できるもあるし、安心して死ぬるというのもあります。

○中島委員 安心は外さないほうが良いと思います。

○石井委員長 正しいご意見だと思うので、むしろ、安心してのほうがジャストフィットしているのかもしれませんが。

今、福田委員がおっしゃったから、それが安心という意味だと思いました。そう言われたら、きっとそうですね。

○中島委員 流れとしては、不安があるから話をして、話を聞いて安心するのですからね。

○石井委員長 安心して暮らし続けるためにという、安心したかったらちゃんと考えろという問題提起部分もあります。ちゃんと取り組めば安心できるということでもあるけれど、啓発的な言葉ですね。

○高橋委員 あとは、市民の意識が変わるきっかけになるみたいなものがあるといいですね。

○石井委員長 やれば安心できるというメッセージですからね。

安心という言葉でいいでしょうか。

ずっと考えていた藤本係長はどうですか。

○事務局（藤本企画担当係長） 安心という表現は、副題の候補の2番目に入れさせていただいています。その前段に「葬送に不安なく」をつける必要はないと思います。不安なく安心というと、裏表みたいにもとれてしまいます。

○石井委員長 そうですね。意味がないです。安心という言葉を使うのだったら、それだけのほうが良いと思います。

○上田副委員長 「不安なく」はないほうが良いですか。

○石井委員長 あったほうが良いですか。どちらでも良いですよ。

後ろの安心は、葬送以外の生活全般が落ちつくという意味合いで使っているのかもしれませんが。副題の2番目のものにしましょうか。

○福田委員 そうですね。

○石井委員長 明確に、テーマに外れず、不安がないことを前提に随分安心できますと。

○山上委員 主題にも副題にも「葬送」という言葉が入るのは、正直、読んだときに、うるさいかなという気がしました。

○事務局（藤本企画担当係長） 我々内部で議論していた中でも同じ話が出ました。どちらかにはっきりさせたいのではないかとこのころはありますが、一旦、両方に入れた形で提示させていただきました。

○石井委員長 僕は、直感的には要らないと先ほど言っていたとおりでありますが、くどく伝えたいのだったら、あってもいいという考えです。

○上田副委員長 もう一方の選択肢は、下を入れるかという話ですね。見送る側も見送ら

れる側も不安なく安心して暮らし続けるということで、「見」が要らないかもしれません。澤委員たちの団体的には、送る側、送られる側も見るという別な選択肢もあるということですかね。もし葬送という言葉が別な言葉に言いかえるのであればですね。余計くどいでしょうか。

○事務局（藤本企画担当係長） 基本構想のタイトルの副題に「多死社会を不安なく迎えるために」と入れているのですが、ここのビジョンの副題に「多死社会」を使うのはどうなのかと思ったのですが、タイトルとかぶってしまうので、多死社会でも安心して暮らし続けるためにとか、葬送とかそういう話を上に主題で言っていますので、そういった要素を含めた表現もできると思いました。

○石井委員長 まとめて、多死社会を安心して暮らし続けるとか。

○事務局（藤本企画担当係長） 将来を目指す形の副題として、多死社会でも……。

○石井委員長 多死社会をでしよう。それぐらいだったら、ぼんやりしていて、あってもいいなという感じですね。

○澤委員 最後に「まち」と出てくるのは、範囲がとても狭く感じたのです。札幌市のことを言っているのですが、まちでいいかもしれないのですが、一人ひとりにとってみれば、札幌市だけのことではなくて、自分の息子や親が地方都市に暮らしているということも含めて考えると、札幌市のまちだけのことでもないと思います。

まちというときの範囲について、市町村の小さい部分とか、1区画だけとか、私はそんなイメージで捉えてしまいました。

○石井委員長 何らかの地域的なことをつけたら、全部限定していることにしかならないので、どのようにつけても限定しているのです。

○澤委員 まちとか、ここは要らないと思ったのです。

○石井委員長 尊厳できる社会とか。

○澤委員 尊厳ある葬送を実現できるようにとか。

○石井委員長 場所ではない言い方をすると、社会とか、違う言葉になるのでしょうか。

実際は意味があまり変わらないから、そういうふうにしたほうが空間的な狭さはなくなりますね。

○澤委員 実現できるようにとか、何か違う言葉にして、もっと広い範囲を指しているように思っています。

○石井委員長 札幌市のビジョンだから、社会と言っても世界中のことを指していないのは誰でもわかりますからね。言い方として、フィジカルなものでなければ、そういう社会とか関係性を言うような言葉を使ったらいいのでしょうか。何かありますか。

○福田委員 実現できるまちではなくて、実現できる未来へというのはどうですか。

○石井委員長 未来ですね。どうでしょうか。

○上田副委員長 ビジョンというのは、意味的にも、将来像、あるべき姿なので、名詞で終わったほうがいいですね。状態をきちんと説明できる。

○石井委員長 エリアイメージをやめるのだったら、社会とかそんな言葉しか浮かばないです。

○ふくだ高橋委員 それは、大きいですね。

○上田副委員長 今後、自治体間競争が激しくなる中で、空間限定というのはどうしても避けられないような気がします。結局、人口の取り合いになる今後の社会の中で、ほかのまちと違う「うちのまち」という独自性を打ち出していかなければいけないという各自治体の戦略の中では、どうしても空間限定を入れないわけにはいかないような気がします。

○石井委員長 地域社会というのはどうですか。でも、余り長くすると言葉がちょっと遊んでしまいますね。

○高田委員 一般的に、「まち」という使い方をしますね。いろいろなプロジェクトでも、必ず「まち」という使い方をします。「街」という書き方もあるのですが、平仮名の「まち」というのは、結構広い意味があって、街全体という意味合いもありますので、私は、上田副委員長がおっしゃるように、ある程度限定する必要があるのではないかという気がします。これは、あくまでも札幌市の計画ですから、「まち」という捉え方がいいのではないかという気がします

○石井委員長 「まち」にかかわる人はみんな変わってほしいけれども、それは排除していない。ビジョンは「まち」のビジョンだということですね。別に言い方を変えても実態は変わらないから、わかりやすいという意味では、札幌市がつくっているビジョンだから、まちづくりという言葉があったほうがよりリアリティーがあると。今、お二人からご意見いただきましたけれども、どうですか。

○澤委員 個人的にそう感じただけです。

○高橋委員 まちづくり戦略ビジョンと書いていますからね。

○石井委員長 全体がまちづくりをやっている中の一環として、そういうつながりで「まち」と言っているのだと思います。

では、そこは、「まち」ということにします。

下はどうしますか。

○高橋委員 副題なので、長くしてもいいのかもしれませんが。

○高田委員 余り長くなくていいような気もします。

○石井委員長 ここら辺は、余り長くないほうがいいのだと思います。

○高田委員 安心して暮らし続けるためにくらいの長さがちょうどいいと思います。

○石井委員長 長くするのが役所言葉の一番悪いところで、副題が長いと副題の意味が全くなくなるのです。

○高田委員 何となくいろいろなことを入れたくなってしまうのでしょうけれどもね。

○石井委員長 どうでしょう。いろいろなご意見が出ましたけれども、思い切って「安心して暮らし続けるために」だけでいかがでしょうか。

絶対的なこだわりがあるわけではないので、こだわりのある方のご意見を尊重いたしま

すので、ご意見があればおっしゃってください。

○上田副委員長 「安心して暮らし続けるために」だったら、正直、なくていいと思うのです。これは、防災の構想だろうが、何にでも使える言葉ではないですか。別にわざわざ入れなくてもいいのではないですか。

もし入れるのなら、むしろ上に入れて、副題をなくしたほうがいいくらいです。尊厳ある葬送が実現でき、安心できるまちで十分いいので、わざわざ副題にする必要がないです。

○石井委員長 言っていることの視点は全然違うので、一緒にしたら長過ぎるというだけの話ですね。まくら言葉をつけるのだったら、多死社会を安心して暮らし続けるためにだったら、そんなに長くないから、違和感はないと思います。

見送る側も見送られる側も不安なくというのは、言葉としてすごく言いたいことはよくわかるのですが、すごく長過ぎるという欠点があるかなというだけです。僕は、ないよりは、あったほうがいいとは思いますが。「安心して暮らし続けるために」だけでもね。

○上田副委員長 せっくなので、このキーワードに挙げられている、例えば、「人生の最期を不安なく、安心して暮らし続ける」とか、唯一使われていないキーワードです。

これは、葬送がバッティングしてしまうところから始まっていると思います。

○石井委員長 多死社会というのをここに出すのは意味がわからないか。

○上田副委員長 せっかく多死社会に対して「まち」で限定した中で、もう一遍、社会に広げてしまっています。要は、上で言ったことをより具体的に見せるための副題なのです。

○石井委員長 多死社会は、環境を言っているわけですから、暮らし続けるのは「まち」の中で暮らし続けるのですから、空間限定が変わるわけではないです。

○上田副委員長 もし副題が要るのであれば、多死社会が個人にどういった影響を与えるかというところをきちんと入れたほうが副題としてはいいです。多死社会という言葉にするより、多死社会が個人に与える影響を入れてあげたほうが副題としての具体的なイメージにつながっていくと思います。すみません。個人的なこだわりです。

○石井委員長 短くつくってください。そうしたら入れます。長過ぎるのは副題として適さないと僕は思うのですが、どうですか。だから、短くうまく表現できるのだったらいいのです。言葉が悪いというのではなくて、長過ぎるということだけに僕はこだわっています。

○上田副委員長 それこそ、死に不安なくでもいいのではないか。でも、死に不安なくは言い過ぎですかね。

○事務局（藤本企画担当係長） 過去の議論では、人生の最期のことなのですけれども、葬送の範疇にとどまらないという話になってしまうので、死に不安がないとか、人生の最期は不安ないという部分で表現を変えてきた経緯があるのですが、改めてここにキーワードとして出させていただいたのは、もう一回、言葉としてうまく使えないかなということ、葬送という言葉も最初に定義はしますけれども、音だけ聞いたときにわかるかなという問題はどうしても残ってしまっていると思います。

○石井委員長 逆に、拡大葬送概念は、どんどん認知してもらわないと困るのです。だから、副題にも、それだったら葬送を使ったらいいのではないですか。葬送に不安なく安心して暮らし続けるためにくらいだったら長さとしてはぎりぎりだからね。また葬送をやめている色々な言葉にすると、長くなり過ぎて、かえってどうかなという話になります。葬送という言葉はいっぱい出てきて、全く問題ないと思います。キーワードですからね。

○高橋委員 ここでまた新たに人生の最期とか出てくると、また……。

○石井委員長 かえって、読みかえて違う言葉を使わないほうがいいと思います。

葬送という言葉は、ここでは非常に幅広く定義しているけれども、そういうふうに定義しないと、ほかに言葉がないという話になっていたわけだから、ほかでは言えない葬送という言葉ができる限りいっぱい使おうと。逆の割り切りですが、ビジョンですから、それぐらいのほうがいいのかもしれないですね。

○高橋委員 そうですね。

○石井委員長 長さだと、ちょうどいいのです。

○高橋委員 前は、ほかの言葉がなくて、「死」とかになるのです。死と向かい合っただか、そういうふうになってしまうのでね。

○石井委員長 さすがに、それはどうかなという感じがします。葬送に不安なくくらいの言葉をつけても全然長くないから、ぎりぎりおさまる長さだから、そうしましょうか。

もともと言葉がないわけですから、ちゃんと定義も書いていただいている「葬送」という言葉ですからね。

上田副委員長がこだわっていることもわかると言えばわかりませんが、限定が何もないと、何だか広がり過ぎという話になります。それだったら、「葬送に不安なく」だと思います。

○上田副委員長 わかりました。

○石井委員長 ということで、いかがでしょうか。「より生き生きと」を「安心して」に直すということですね。

○上田副委員長 主題の「それぞれ」は皆さん余り気にならないですか。

○山上委員 私は要らないと思いました。先ほど藤本係長が説明していたところは、「それぞれ」がなくても、これを読んだ人は尊厳ある葬送という定義をみんな各自持っているものですし、誰か唯一のものを持っているわけではないので、私は要らないと正直思っていました。それがなくても、伝えたいことは伝わるのではないかと思っていました。ここもうるさいと思っていたのです。

○事務局（藤本企画担当係長） 前回の会議の中では、尊厳をもってという表現になっていたのですが、尊厳ある葬送だけにすると、市として、こういうものが尊厳ある葬送ですよというのを提示しているようにも、取られてしまうのではないかなという懸念もあったのです。それを実現するまちを目指すのですよと。あくまでも、そういうものを我々が提示するわけではなく、人それぞれが考える尊厳ある葬送を実現できるようにしてあげたいという趣旨なので、そういうことを強調するために「それぞれ」を入れた案になっていま

す。

「尊厳をもって」という形であれば、実現の方に係るので、葬送のことを特定して修飾するわけでないのです。「尊厳ある」にすると、葬送を修飾することになりますから、「ザ・葬送」というようにとられてしまうのではないかと考えました。

○高橋委員 見送る側と見送られる側の両方という意味ですね。

○事務局（藤本企画担当係長） それもありますし、「人それぞれ」のそれぞれという意味もあります。

○高橋委員 なるほどですね。

○石井委員長 一緒ではないということですね。尊厳ある葬送は定義がないということです。

○山上委員 そもそも尊厳とは何ですかという話になったときに、自分はよくわかりません。定義があるわけではないのだったら、それぞれがなくてもいいと思いました。

ただ、定義がありそうな言葉であれば、それぞれのというものが必要なのかもしれないですけども、そもそも尊厳ある葬送に定義がないのであれば、だからこそ提示できるわけではないですし、だったら、「それぞれ」は要らないと思います。

別に入れてもいいのですが、私はうるさいなと思っただけです。

○石井委員長 私はどっちでもいいですよ。下が少し長いから、短くしたらどうかという程度です。とったからすごく誤解されるということも、おっしゃるとおり、ないと思います。

主題はシンプルに、副題は少し具体的にということですね。下は長いから、上は短目でも、バランスはそのほうがいいのかもしいという程度です。でも、「それぞれの」というのがないと、意味が変わるほどのことではないです。

○上田副委員長 主語を示したほうがいいです。尊厳ある葬送を実現できるまちだと、行政がやってくれるということになりますので、むしろ主語をきちんと入れる意味で、「の」より「が」のほうがいいと思います。

ただ、人それぞれならわかるのですが、「それぞれ」だけだと、それぞれの何なのかという感じになってしまいます。人それぞれとか、市民それぞれとか、それであれば「市民が」だけでもいいのかもしれませんが。あえて主語を示していくということであれば、何かを入れるのもありだろうし、今、委員長がおっしゃったのも、確かにそのとおりだと思います。

○石井委員長 上で「市民の」というと、そうではない人は葬送を受け入れないみたいな話になるから、ここは限定しないほうがいいというだけです。各自とか、そういう書き方をすると、またちょっと、何それという感じになります。余り適当な言葉がなくて、それぞれになっているのだと思います。

これは、どっちが親しみやすいかという話になると思います。

○高田委員 例えば、一人ひとりがというのはまずいですか。

- 石井委員長 誰もがというような言葉にしましょうか。
- 上田副委員長 一人ひとり、誰もが、みんなのどれかですね。
- 福田委員 みんながいいですね。
- 高田委員 個々を大事にするということであればですね。
- 上田副委員長 みんながいいのか、一人ひとりがいいのか、実は結構違うような気がします。
- 福田委員 そういうイメージであれば、どちらでもいいです。
- 石井委員長 みんなというのは、あまねくだからね。
- 福田委員 広くということですかね。
- 上田副委員長 それぞれのニュアンスを残そうとすると、一人ひとりがですね。かつ、その孤立死の問題とかが念頭にあるとすると、一人ひとりのほうがよかったですね。
- 事務局（藤本企画担当係長） 死が一人の問題であれば、一人ひとりにははまると思うのですが、葬送は、ある程度複数の人数で送り出してあげたいと思いますので、そういった意味ではみんなのほうがいいと思います。一人ひとりだったら、その中でばらばらであったものを、どうやって実現するのかという話にもなってしまいます。
- 石井委員長 それでは、「みんなが」にしましょう。
- 言葉にはみんなこだわりますので、議論し出すと、非常にきりのない世界になってしまいます。でも、それぞれよりみんなのほうがいいかもしれませんね。
- では、このワーディングは、それでいいですか。上は「みんなが尊厳ある葬送を実現できるまち」で、下は「葬送に不安なく、安心して暮らし続けるために」ですね。
- 上田副委員長 下が結構大きく変わっていると思うのですが、具体的なイメージの右上で、「単身者の葬送をする体制が整っている」とありますけれども、葬送はするものなのですか。どういう動詞がいいのでしょうか。
- これは、今まではなかった、かなり新しく切り込んだ表現ですね。ほかは余り変わっていません。四つのうちこれだけがかなり突っ込んだ表現です。
- 事務局（藤本企画担当係長） 申しわけありません。文字が抜けていまして、「支援」する、です。
- 上田副委員長 そうなのですね。しかも、今までの市民の葬送から、単身者の葬送に変えたというのは、かなり突っ込んだ限定です。
- 事務局（藤本企画担当係長） 変えた趣旨として、まさに支援をしてあげなければいけないのは、単身の方で、自分が亡くなった後に、誰にも葬送をやってもらえない人たちと思ひまして、市民にかわって「単身者の」と言いかえをしました。
- 石井委員長 そうではないのではないですか。自己責任で備えろと言っているのです。支援するのはみんな一緒だと言うほうがいいと思います。余りちゃんと見ていなかったけれども、単身者だけ支援するというのはナンセンスで、単身者ではなくても、むしろ経済的な事情等々がある人を支援するというだけのことです。基本は、それぞれの人が自分の

亡くなることには準備をしましょうというのがこの話のストーリーです。そこは、少なくとも経済的なものは支援の対象として分かれるところは支援するということで、単身者が特別というのは必要ないと思います。

○高橋委員 前は、市民の葬送をでしたね。

○石井委員長 むしろ、前のままのほうがいいのではないかと思います。

○事務局（西尾生活環境課長） 例えば、葬送に必要な支援をする体制というのは変でしょうか。「支援」はあった方がいいでしょうか。

○上田副委員長 行き倒れた人というのは、市民ではないですよ。何と言いましたか。

○高橋委員 行旅死亡人です。よそから来た人ですね。わからないですね。

○上田副委員長 だから、市民限定すらできないのです。確かにおっしゃるとおりです。

○事務局（藤本企画担当係長） これは、支援というより、法的に義務でやらなければならないということです。

○上田副委員長 そうですね。

ここの組み立て、ちなみに先ほど最初に私が質問した左と右の意識のほうと環境のほうに分かれているのですが、意識醸成が左で、火葬場と墓地が右という分け方に対応するのですか。それとは別に関係ないのでしょうか。

○事務局（藤本企画担当係長） 基本的にはそういう分け方になります。葬送支援する体制というのも、単純に物理的環境が整っている火葬場とか墓地が整備されているのと同じようなことだけではなく、制度的なサポートもあるでしょうし、意識醸成の働きかけの範疇でできるところもあると思いますので、完全に切り分けてしまうということは、あえてする必要がないと思います。

そういった意味で、第7回会議の10月1日に送った資料では、市民の姿とか、事業者、行政ということもはっきり書いていたのですけれども、そこも外して、主体としての位置づけも縛りたくなかったのです。

将来、目指す姿として、まちというのは具体的にどうなっているのか、意識して行動しているのは市民の話ですけれども、行政も我々の内部の中でいろいろな部署がありますので、そういったところを含めての話をしなければいけないと思います。第6章の切り分けと完全にリンクしているものはないのです。

○上田副委員長 市民の葬送を支援体制というのは、具体的にこちらの構想の中だとどれに該当するのですか。

○事務局（藤本企画担当係長） 協議体をつくって、何か支援、働きかけをして、死後事務委任契約の枠組みをつくってあげたり、もちろん火葬場、墓地の関連の部分もあります。

○上田副委員長 単身者にはしないほうがいいということですね。

○石井委員長 少なくとも、単身者にすると限定し過ぎだから、市民でも限定する、もしくは、支援というところの使い方、いっぱい支援を求められるような意味合いにとられるのは困るのだったら、困らないような言葉を考えたほうがいいかもしれません。

○上田副委員長 すみません。先ほど課長がおっしゃったのは何でしたか。

○事務局（西尾生活環境課長） 葬送に必要な支援の体制が整っているということです。誰が必要と判断するかということがあります。

○上田副委員長 そうですね。必要とされた話だったら、協議体の話とちょっと違ってきますね。必要となったものに対する支援ですからね。

○石井委員長 円滑な葬送を実現する体制が整っているだと固いけれども、そういう意味だと行政に余り負荷がかからない言葉になると思います。言葉はよくないですが、そういう感じに逃げると、ちょっと……。

○高橋委員 そういう部分がありますね。火葬場で1週間待たないでというのもありましたからね。

○石井委員長 むしろ、ソフトとしての葬送が誰でも円滑に進むことで、一部、支援が入っているけれども、主語は別に市ではないのです。

○高橋委員 円滑か。

○石井委員長 言葉は練れていないけれども、そういう言い方をしたほうが誤解はないかなという気がします。特に、支援と言うと、さっきも言ったけれども、支援がメインに出るビジョンでないので、できるだけ言葉としては使わないほうがいいかもしれませんね。

○上田副委員長 円滑ではないほうがいいですよ。

○石井委員長 言葉は、もっとやわらかい形容詞を考えなければいけないと思います。問題ない葬送というか、そういうことが実現できるということなのだと思います。円滑という言葉はあまりよくないと僕も思います。

どんな言葉でしょうね。

○高橋委員 困らないみたいなイメージなのですね。

○上田副委員長 難しいですね。

○石井委員長 言葉が浮かばないですね。

○高橋委員 スムーズなではないですよ。滞りなくとか、そういうことですよ。

○石井委員長 滞りなくのほうが円滑よりましかもしれませんね。

○高橋委員 ちょっとかた苦しいですね。

○石井委員長 かた苦しいけれども、円滑というと葬送を軽く見ているような感じがします。スムーズといいますか。

葬送を滞りなく実施する体制が整っていると。滞りない葬送でなくて、葬送を滞りなくとすると、後ろに来るからざらっとしないと思います。言葉が滞りなくだと葬送にフィットするけれど、円滑というところとちょっと何かまずいかもかもしれません。

言葉が難しいですね。僕たちは、こういうものに悩むのが仕事ではないと思うのですけれども、言葉に随分悩んでしまいます。

葬送を滞りなく実施する体制が整っているというのは、そんなに変ではないと思います。

いい言葉が浮かんだら、違う言葉に変えます。浮かんだら。

○上田副委員長 要は、火葬場でも待たされず、墓場でも待たされずということですね。
○石井委員長 この言葉が入っている意味はあると思うのです。支援ではなくて、ちゃんと流れるということで、スムーズにという言葉もありましたが、そういうことができるというのは、市だけではなく、関係者みんなが努力して、市民も努力して実現するという話はあったほうがいいと思います。

言葉としての円滑はだめだけれども、滞りなくは少し重たいかもしれないので、もう少し軽やかな言葉があれば置きかえていただきたいと思いますが、余り言葉がないですね。

○高橋委員 支障もなくとか、そんなものになりますかね。

○中島委員 普通の挨拶であれば、滞りなくですね。文章にするから難しいのです。

○高橋委員 漢字にするとすごいですね、滞りなくというのは。

○石井委員長 平仮名で書いておけばいいと思います。でも、葬送という言葉に合う言い方をした方がいいですね。

○中島委員 「滞りなく」というのは、葬儀委員長さんのよく使う言葉です。

○石井委員長 何となく関係性で言うと、なじむ言葉だと思います。

○上田副委員長 ちなみに、動詞は、実施すると実現するだと、どっちのほうがしっくりきますか。

○高田委員 実現ではないですか。

○山上委員 広い意味でやる葬送であれば、実施よりは実現のほうではないでしょうか。

○石井委員長 実現のほうがいいかもしれませんね。

○高田委員 実現を目指してですね。

○山上委員 狭い意味だと、実施になってしまうのですけれども、広い意味で使うことを前提としていますからね。

○上田副委員長 そうなのですね。

○石井委員長 体制の話だから、実現する体制のほうがいいかもしれませんね。実施する体制といたら、ちょっと意味が変わってしまいます。

○高田委員 例えば、必要に応じた葬送をする体制が整っているというのはどうですか。その必要に応じてということですね。必要でない人もいますし、必要な人もいます。必要に応じ、葬送する体制を整えるでしょうか。

○石井委員長 必要に応じるかどうかは、わからないのです。その人が必要だと言っても、どこかに捨ててくれという類いのこともあるので、その人が必要としていることと、ここで言っていることは、全然イコールでないです。わがままを排除するという話がずっとありますからね。

○高田委員 ただ、単身者という人が亡くなったら、必要に応じるも応じないも、見た人が、これは必要があるかないという判断しかないですよ。本人が必要とするというのはないですよ。例えば、単身者が亡くなってしまって、誰も見てくれる人がいない状況というのは、本人が必要とするとかしないとかではなくて、周りにいる者が見て、必要か

どうかという判断ですね。その状況を見るのが協議会なり行政なりであって、支援が必要かどうかということです。特定をしないで、つくっておくということですね。

○石井委員長 滞りなく実現するという中に、それぞれの必要性に応じてというのが入っていると思うのです。ニーズにだけ応えるという出し方ではだめだと思うのです。だから、当然、ニーズも踏まえなければならぬけれども、ここで実現するものは、ニーズ全てに対応しているかどうかはわからないけれども、ちゃんと済ませると。誰かにとっての必要を満たしていることにはなるのではないかと思うのですけれどもね。

○高田委員 先ほどおっしゃったように、お金がたっぷりあって何でもできる人はいいですけれども、単身者といってもいろいろな人がいますね。そういう状況を見ながら、その必要性を、本人が認めるのではなくて、周りがしてあげることでしょうね。

例えば、単身者が葬送する体制が整っているというのはですね。

○石井委員長 誰をとというのは書いていないから、全ての人が亡くなったときは、滞りなく葬送を実現するというので、言葉の意味はそういうことだと思います。

○上田副委員長 高田委員のおっしゃることは、すごくわかる気がしています。構想の中味の内容から言えば、滞りなくの方がじっくりくるのですけれども、上のビジョンとイコールであることを考えると、不安を取り除いてくれるのは、滞りがないことよりも、必要な葬送が実現されることのほうが不安を取り除くことにはつながっているような気がします。ビジョンとの親和性に近いのは、先ほど課長もおっしゃったけれども、順番を入れかえて、必要な葬送を実現する体制が整っているほうが、不安は取り除かれるかなというのもわかります。すごく悩ましいですが、どこを強調するかで、どちらがいいかは違ってくるような気がしています。

○高田委員 こだわっているわけではありません。

○事務局（藤本企画担当係長） 左側の「意識が変わり行動している」と補完し合う関係になりますので、生前に単身者の方がいろいろ準備をしておいていただければ、それを滞りなく実現するというので受けることはできると思います。ただ、そこまで読めるかという難しいところがあると思います。

○石井委員長 必要な葬送というのは、誰にとって必要かということは書いていないから、葬送の形容詞として考えると、すごく華美でもなく、それぞれの話だから、言葉としては、こっちのほうが難しい言葉が何もないから、最初に円滑にと言ったことと意味は余り変わらないのでしょうね。だから、滞りなくということとも変わらないということですね。変わらないかもしれませんね。

これ「必要な葬送を実現する体制が整っている」になればいいですかね。

○上田副委員長 それか、「葬送を滞りなく実現する」との2択になっています。

○福田委員 どちらでもいいです。

○石井委員長 必要な葬送といっても、余り誤解はされません。すごく特別なことをするという意味は何もないです。

○上田副委員長 必要な葬送は、課長が先ほどお考えだったことに近いのですか。

○事務局（西尾生活環境課長） 特に、こだわりはないです。支援という言葉がなくなったので、どちらでも構わないです。

○石井委員長 支援はないほうがいいとお考えだから、どっちでも意味は通じるからね。

言葉としては、滞りなくというのは難しい言葉だから、固いけれども、必要なというのはシンプルです。文章上はシンプルな言葉になるから、必要だというほうが落ちつきはいいかなと思っています。

高田委員のご意見を聞いて、最初はどうかのかなと思ったけれども、いいのではないかと思います。別にどっちでも同じ意味だと思います。

最後なので、これ以外の部分でもご意見があればお出しただければと思います。

○高田委員 まず、2ページですけれども、8行目くらいに、「さらに、人間は」とあります。これは「人は」でいいという気がしました。

それから、社会状況に関する背景ですが、5行目に、「亡くなる方の数が」とありますけれども、「の数」は要らないと思います。

次の3ページです。基本構想を策定した趣旨のところ、6行目に「これらの問題を解決して、市民の葬送」とあるのですが、「市民の」は要らないと思いました。「葬送」だけでいいと思いました。

それから、27ページの事業者の関わり方の一番初めに、「行市民」というのがあります。

○事務局（藤本企画担当係長） 誤植です。すみません。

○高田委員 それから、29ページの葬送の検討に係る協議会のところで、一番下に地方公共団体と入っています。これは、札幌市ではなくて、札幌圏のほかの公共団体も含めてということで地方公共団体と書かれたのでしょうか。

一般の人は地方公共団体というのは余りなじみがないと思うのですが、札幌市が正しいのか、札幌圏の何かがありましたね。それが入るのかわからなかったもので、教えてほしいと思いました。

○事務局（藤本企画担当係長） そこまで広い範囲は想定していませんでした。これまでの流れでは、行政という表現をしているので、そんな書き方に変えたほうがいいと思っています。

○高田委員 行政もしくは札幌市が入ると思いました。

以上です。

○石井委員長 ありがとうございます。

せっかくのご意見なので、ご検討をいただきたいと思います。

ほかにいかがですか。

最後まで言葉の難しい分野で、私は委員会でこれほど言葉の議論をしたのは初めてでした。なかなか定着していない言葉が多くて、葬送とした言葉に少し負荷をかけて、従来使

っている言葉よりも広く概念を載せて表現をさせていただいたのですけれども、そういう意味合いをちょっと普及するぐらいの部分があってもいいと思います。多分、こういうことが議論されていなかったから、言葉もないという現状だと思います。

○高橋委員 初めて議論をしたので、こういう言葉を決めなければという形になりましたね。

○石井委員長 こういう議論をしていなかったから、言葉も選べないということがあったのだらうと思います。そういうことも含めて、議論して啓発するということをもう少しやっていないかならなかつたのだと思います。まさに、そういう方向がちゃんと出ていますので、ぜひ引き続きそういうことを、少し地味ですけれども、きちんと取り組んでいただく意味が非常に大きいと思います。ぜひよろしくお願ひしたいと思います。

7回にわたり、皆さんのいろいろな視点でのご意見をいただき、この委員会としては、一定の共有を見ましたし、事務局のご努力で、どうなることかと思っていた基本構想も、割と読みやすいコンパクトな形に仕上がったと思います。この後は、市の中で頑張っていて、きちんとポジションもつくっていただき、予算もとっていただき、実現に向けて動いていただくということかと思しますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

最後に、スケジュールについて事務局からご説明いただくことになっております。

○事務局（藤本企画担当係長） 資料4をごらんください。

今、委員長からおおよその流れはお話しいただいたのですが、今回で委員会は最後になりまして、この後は札幌市内部の会議を進めていき、今年末、12月下旬ぐらいからパブリックコメントで市民からご意見をいただく手続を始めます。そして、最終的な基本構想を取りまとめいたしまして、3月中に基本構想を策定し、公表という流れになります。

この間の会議の開催はないのですが、もちろん、完成した段階では委員の皆様にはご報告させていただきます。流れとしては、今年度で完成という予定になっております。

以上です。

○石井委員長 最後に、言い残したこととかがあればお受けいたしますけれども、よろしいでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

3. 閉 会

○石井委員長 それでは、これで終わりますので、高木部長からご挨拶をお願いします。

○事務局（高木生活衛生担当部長） 改めて、検討会の終わりですので、ご挨拶申し上げます。

昨年の9月の立ち上げから今回の7回まで、1年以上にわたりいろいろとご議論をいただきまして、ありがとうございました。

今、委員長から最後の言葉が出ていましたが、火葬場とか墓地というのは、死を連想する話なので、行政の側でも表だつては余り触れてこなかつたというのは正直なところかと

思います。

ただ、今後の多死社会について、墓の無縁化など問題点を考える中では、待ったなしの状態ではあるということから、今回このような検討会を立ち上げて、いろいろご議論をいただいたところでございます。そういう意味では、どういう言葉を使うとか、今まで議論していなかった中では、皆さんに多大なご協力をいただいたことに、本当に感謝を申し上げたいと思います。

今後は、今年度末を目指して基本構想を策定してまいります。構想ができ上がった後は、協議会のようなものを立ち上げて、実際にこの中に書かれていることを具体的に検討していくという手続を今後していきたいと考えております。その中で、またご協力をお願いする部分もあるかと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

最後に、今回、ご議論をしていただいた中で、ビジョンがまとまるのに大変時間を擁しましたけれども、「安心して」という非常にわかりやすいキーワードをご提示いただきましたので、我々としても、市民の方に安心をして、いろいろ葬送を考えていただくと同時に、我々自身も施策をいろいろ考えていく中で、安心して頑張っていきたいと思っております。今後とも、よろしくお願い致します。

本当に、1年間以上にわたりご議論をいただきまして、どうもありがとうございました。
○石井委員長 どうもありがとうございました。

以 上